

堀秀成著
言靈妙用論
上卷

ホ 2

4297

1



71 2
4297
1-2

堀 秀成先生著

言靈妙用論 二冊

南浦堂藏版



遠く他より何れも此の如く
元来此の如くをくわの如く
あはれも此の如く元来此の如く
ぬ。世の人の如く。乃。此の如く
あるは。此の如く。乃。此の如く

志とやしすら忠孝のこころに
のの字の具こゝ他はなほある
これこそあるはけきと成す成
まきまきすもれもたぬ
いふもあつらひぬいふをいひし

の乃孝きさうひある國の
語をよむひあつらひぬいふ
いふあしきまあるはけきの
ふともく親しきまある今
ふしきふをいふはけきの

世よりうつくしきあはれにまじりて
とおのの國のいさをはたきし
海きものもあはれぬはひの
ふと船子ゆき志のいふとありき
くたけいよむおのの舟の舟の舟

よしとひとくたの舟を船子
んむとやんむと舟のおの
しとましとあはれいさか
と舟をくたの舟の舟を
きりもなまむくたの舟

よいては一卷もその言のたむ
 ぬを端々の中ひききよはあ
 るしうくふつはねの十年の四月
 ろくしふもひもし系赤飯よ
 何む権秀成

言靈妙用論

上巻目録

古言語正しき事

皇國言の諸夷の語言は甚く勝れた事

文は漢語を用ふ頃も成りても猶語を宗し

勢し事

古語の學問せよ開けた事

古語の學盛ふる勢よ從ひて遂に音義學興りたる

事

下巻目録



上下二冊

聲音の出す本源の事

物に觸れて感心有聲の中より含み舌に觸れて諸音をふる事

聲音は象と意と巧みて萬物萬事をうつて言語とふる事

有音の諸音のなごりめなふ事

横韻位置の事

三十六音令生の事

以上十一條

言靈妙用論上卷

堀秀成著

○古言語正一の事

古言語の雅しく美しくことは、皇國哉稱へ

て言靈能佐吉播布國といへばをもちて先知るべ

し斯て言靈能佐吉播布國といふは、萬葉集

卷五に、遣唐使丹治比真人に贈る多乎山上臣憶

良が長歌、神代欲理、云傳介良久、虚見津倭國者

皇神能伊都久志吉國、言靈能佐吉播布國等、加多

利、繼伊比都賀比計理、今能世能人母許等期等、目

言

靈

さ

は

前^マ爾^ニ見^ミ在^リ知^リ在^リ云^クと詠^ヒ免^レりきて其^ノ言^ハ靈^ノハ言^ハを
 言^ハ語^ノの言^ハよ^ク毛^シ能^ク云^フ音^ノ聲^ノの体^ノ用^ノ乃^チ言^ハ哉^ハお^レを
 へ^ルふ^レ靈^ハ目^ヲよ^ク見^ミ認^メ難^ク手^ノふ^レ取^リ難^ク奇^ニ異^ニ
 尔^レ志^ス了^ル物^ノの内^ニ寓^ス多^ク主^本と那^リ、皆^チ乃^チ物^ノの妙
 用^ヲを宰^スる^ヲを云^フ佐^キ吉^キ秀^キ榮^キ咲^キ開^キ幸^キ等^ノ尔^レ同^クく^レ物
 の榮^リ了^ル哉^ハ云^フ播^ハ布^ハを能^ク推^シ披^シ不^レ貌^ル了^ル英^ニる^レよ
 同^ク言^ハ也^ハ此^ヲを取^リ統^テ云^フハ言^ハ靈^ト連^續く^レる
 靈^ハ靈^妙ふ^レ神^氣を人^ノの元^氣く^レて給^リ其^ノ元
 氣^即言^ハ語^ノの種^ホれ^バ也^ハ委^レき^レこと^ハ已^ガ著^シ
 たる^レ靈^氣考^アあ^ツき^テ見^ルべ^クさ^レる^レよ^ハ此^ノ歌^初

尔^レ神^代欲^理云^フ傳^介良^久と語^ヲを發^スて言^ハ靈^能佐^リ
 吉^キ播^ハ布^ハ國^等と受^ケて下^ル加^多利^繼伊^比都^賀比
 計^リ理^ト續^ケた^ル尔^レ仁^明紀^ス日本^之倭^國波^言靈^乃
 乃^チ富^國度^曾古^語尔^レ流^來礼^留神^語尔^レ傳^來礼^留と
 尔^レ子^ヲを合^セて此^ヲ言^ハ靈^能佐^リ吉^播布^國と云^フ祢^々
 とし上^ツ代^ヨり云^フ傳^ヘた^ル尔^レやん^ガを^オき古^語
 尔^レ子^ヲ去^レを^オ知^ル然^レバ初^ニ乃^チ神^代欲^理云^フ傳
 介^良久^ト云^フ語^ト下^ノ加^多利^繼云^フと^ハ以下^ハ
 凡^テ歌^主憶^良の語^ホれ^ドも其^ノ中^間尔^レ不^皇神^能
 伊^都久^志吉^國言^ハ靈^能佐^リ吉^播布^國と^ハ尔^レ語^ハ即^チ

世々の名、また祖先よる傳りたる業、伐祖の名、また氏々名々ふど云へるは、名は其業を呼ぶ祿よる業ハ即名の如く為るものふれば也、景行天皇の大詔詞ハ、大倭國者以行事負名國也と云ふハ、則此意あり、

此詔詞ハ高橋氏の氏文中行事秘抄等ハ、所載也、然れば言靈能佐吉播布國といふ名を明らるる辨ふるときは、古言語の雅しく美しく、大とも明らるる事知らるることあり、

中古のものふから、兼良公の纂疏ハ有天地以來、萬物之情備乎言、是自然之理也、まこと神代卷口訣ハ事理雖幽微、和語顯玄妙、ふどあとも共ニ言語といふもの、妙あることをいへるなり、

斯て古常の言語の雅しく、證は伊以、韋有、宇衣、延、慧、於、遠、の十音ハ五十音の中よる其差別甚隱微よて、今世よるては分曉がたきものなる哉、古ハ小も淆乱る大とふくいと明白なること、とは古書どもは假字用格貫きて、つも紛ハるる

大となきをもて辨ふべし、又仁賢天皇顯宗天皇
ハ御同胞よおとしまは、兄御子を弘計王、弟御
子茂袁計王と申奉り、開化天皇皇女御同胞よて
意祁都比賣、遠祁都比賣と申奉る、

何れも兄御子の方ハ阿行の於、弟御子の方
ハ和行の袁也、

此等今世能如く言語清乱、音聲舛訛たるうへり
ては弘計王と申奉るも、遠計王と申奉るも全く
同一言の如く聞えて、いとも紛ハきものあり
を、古常の言語のうへよ此等の差別いと正しく

分れたればこそ、御同母の御兄弟よて如此申奉
るも小サう紛れあらざりしも能あは、是をもて其世
の言の雅しうまじことを推量思ふべきよとな
る、又祖父ハ阿行の於、伯叔父ハ和行の遠よて分
れ、老女ハ阿行の於、少女ハ和行の遠よて分れた
るも同トことあり、はてま記紀の歌百八十首、
萬葉集の歌四千五百首あれども、活語の格、助辭
の法、自然よ備えて小サうも違ひ謬ることなきを
もて、嚴正しくまじことを知るべし、

萬葉集數多の中よ、總よ六七首定れる格よ

協カハざるよやと思ふもあられど、傳写の誤また
訓誤れりもあるべきことは、既カに先輩も委
しくいざれたるごごとし、

○皇國言は諸夷の語言は甚く勝れたる事
皇國言は天地間、純粹正雅の音あるを、諸蕃の語
ハ此レは異フありていをもゆに侏離、腭舌ノいして、鳥獸
萬物の聲は近く、朦朧トして曇天を瞻ミるごと
きもの也、さるは漢字音のうへよても、刺ク、擣ク、梳ク、
の音ハ犬の声は近く、彬シ、賓ヒ、濱ヒ、等の音は馬の聲
は近く、謀モ、母モ、茂モ、母モ、等の音は牛の声は近く、斬チ、肘チ、晝チ

抽チ、丑チ、蓄チ、傳チ、紂チ、等の音ハ鼠ノまゝと雀ノおど、此ノ聲ハ似た
る、其外、蝮シ、盤シ、伴シ、阪シ、等ハ版ノを打ク音ハ類ハ、歡シ、桓シ、還シ、緩シ、
晚シ、換シ、等ハ鐘ノを鳴クをハ紛ヘる、さるを皇國言の天ノ、
地ノ、日ノ、月ノ、海ノ、山ノ、花ノ、鳥ノ、おどいふ聲のいづれの物の音
よかよむむ、いさゝらも鳥獸の聲物の音おどよ
類ひれたる言ふきをもて、彼ノと此ノとの勝劣尊卑を
辨シふべし、凡テ諸蕃の語ハあゝひハ長く引キ、色ハま
た促リりて短キ、色ハよて正シき單直の音あらざり證
ハ卷曇字記は短キ、色ハの對注は阿ノ字を用ゐて短キ、呼
べ、音ハ近キ、惡キ、長キ、色ハも阿ノ字を用ゐて依リ、色ハ長く呼ベ、

短イは伊字を用ゐて色近イ於翼反イと注せども、入聲は近きやうは短く呼を云、又億の字を用ゐて以上、伊色イ、稍短く呼之、長のイ、よも伊字を用ゐて依字長く呼べと注せる、是單音ゆらぬ明徴ふるをよく思ふべし、又漢土よハ韻を常とて、故は平聲乎地として上去入を一併よして、仄聲と喚へり、皇國ハ發端の音色、母とて、即五十音也、然るよ音ハ首イ韻ハ尾イとて、音をもて皇國言をふんハ、皇國の頭は位を自然言色のうへは頭イ韻をもて漢字音をふんハ、漢土の尻は居る乎音色

阿行流の中未よし
良行諸音にや

のうへは頭イたるものよて、其理争ひなく、いとも妙イふるものあり、又皇國言の正しく嚴なることは阿行ハ、五十音の本音あるゆゑ、語の中下は属イくことふく、悉く言の頭は属イき、良行ハ末音あるゆゑ、言の上中は属イくこと絶えてあるふとあし、

音圖のうへよてハ和行終はあれども、此行ハ阿行の反對の義あれば、猶良行をもて終の音とあし、ろろり、

皇國言ハ如イ是イ著明イその法自然は定めるを、漢字

入声おし

音をなづめ外國の言よ、うゝ、於正しき格あり、大
 とおし、又入聲ハ急促て正し、うらぬ音形れば、皇
 國言ハ平上去の三聲よ、て入聲ハあらざる也、
 そは古事記書紀等の假字よ入聲の字を用ゐざ
 るよても知るべし、但意ハ億の畧と云るときは、
 此、一字のし入声おれども、意を轉用して、オの假
 字よ用ゐたるよや、おかゆれば、猶入聲の假字
 ハあらざるなり、又濁音ハ変音よ、て正し、うら
 ざれば、頭を濁る言ハ一言もあることおし、
 何よ皇國言ハ奇異あるま、て正し、まものあり、に

駁

や、
 駁といふ言多常は頭を濁りて云ども、大は
 本赤駁黒駁ふど合言といふとき、駁
 とよぶるが轉りて、一言よ放ちていへ
 頭を濁りていふ言とふれよも、
 合言のときは下の言の頭を濁
 譬へ箱も手箱硯箱文箱ふどい
 ひ、川も山川谷川小川ふど下の言を濁れる
 如し、

又皇國言は体用の中用言ハ悉く活動たる例よ

語尾変化
あり故

了、譬へは開といふ語ハ、比良加、比良支比良久、比
良介と加行四段ハ活用令開意のときハ、比良加
世、比良加須比良加須流、比良加須礼と、佐行二段
ハ流礼の音の添りて活用キ、他ハ所開意のとき
ハ、比良加礼、比良加流、比良加流々、比良加流礼と、
良行二段ハ猶流礼の音の添りて活用をふぐ
如く、何れの詞も如此活用をふぐて、其段毎ハ末
然、過去、現在の格、また体語ハ續く格、用語ハ續く
格等を具へたること、いと委曲あふ大に形
を、漢字音ヨウヨウ活用の例あることあり、此、外

皇國言ハ諸夷の語ハ甚く勝れたること種々多
うれども大方ハ漏らしていた、以、猶別ハ云ふべ
し、

○文ハ漢語を用るうく頃ハ成りても猶古語
哉宗とせし事

中昔よいたるては常ハ漢文ハ物うく習とあり
て、自然古語ハ廢れゆく世とあり、うども、宗と
りし重き事よいたるてハ、猶古風ノ文章ハ聯ら
ぬたることは大御代々々の宣命の續紀ハ載ら
れたるをえしめ、史ども見えたる体裁よても

知らる、まゝと也、まゝと天地の神を告る祝詞の文
のやんごととあく、古く正しき体を用ゐられたる
ことは延喜式の八巻あるはさらよといはば、夫
よその後あるも猶つとめて古体は書れたるも志
ふべし、

延喜式は記れたるは、當時作れたるよはあ
らで、いと古くよも傳へたる古文あること
ハ今更いふまでもあらば、

さるは朝廷の大御政事を天下に詔し給ふ宜
命、まゝと天下を治給ふ大政の初は、天地の神を祭

て給ふ祝詞の文ふども、如式正事至
りては皇國固有の古文を用ゐ給ひしことは萬
の事は漢風の行はるゝ世となすても、志うけが
よ上代の風儀の廢れ果ざりて微ふを阿多けら
斯て書紀ハ專ら漢文の体は書れたるものあれど
も、猶古語を失ざる為は作者自身訓注を添へら
れて、宗たる語ハ皆古語のまゝと訓へべきものと
せられとす、

此等のことら已が著したる神代のをつつ、
といふものは委しきいへり、

されバ私記シ此書為躰レ以立倭訓為本、不可レ能
文為宗とありて書紀の作者の古語ヲ重く心
を用ゐられて書れたるものハ不レ知るべ
し、又古事記ニ凡てハ漢文ハぶぐら宗た不レ所々ハ
いと上代の体カあつ古文もて編れたる所の所
るハ、序ニ撰録稗田阿礼所誦之勅語之舊辭トい
る、古語の字、辭の字をハおもへバ古語のまゝニ傳レ
たる辭書ノありしニよられたるものハお教べけ
れば、彼記ニ古文の雜レれたる所々ハ、昔の舊辭トい
ふものをハ少レらも違へば記れたる所ハあつレ、

古事記中ニ雜レれたる古文ハ、已ニ古レ文語脈考
ニ載せて委レし、いへるを見たまふべし、
又續紀聖武天皇、宣命ニ天皇、御母藤原夫人、宣ニ文ニ則
皇大夫人、語ニ則大御祖母トありても語のうへを重
くせられて、古語ニ稱へ奉レたまふものハあつ
斯てまた和名抄の頃ニいたしてハ益漢風の語
のミ行をハまゝニ古語ハ漸く衰レゆきし頃ハ
れども其序ニ甲書業書トいふことありて、甲と
ハ口ハ開けバ語抄の微妙ハるを裏揚げ、業トハ
其書ニ服膺讀レ習ふニよリて即學問の下地トして

ハをゆる階梯ニ用ゐたる書どもをさせたる也、さてそのさせたる書ハ漢語抄の類也、

漢語抄トハ漢字和語抄の意にて漢字ハ和語を充て抄たる由の書名おれ残中の字和の二字を省きて漢語抄ト題号したるもの
おも

とて漢文よて志したるものを學ぶよも、此如く和語を專ら心得てその和語をも漢字を訓譯したるもの也、又童蒙抄にあり人北野ははうで、東行南行雲眇々、二月三日日邊々、とあふ

詩を詠トつてまじろむ夢又トサマニニキ、カウサマニニキテ、クモハルバル、キサラギヤヨト、日ウラ、くともそ詠ぞれとあふせられサ、見見えたるハ中古までハ正しくハ詩をたまたまよめま、を思へば、いさゆる侏離、舌ふる漢轉をばいとも卑しく聞よらぬま、美しくハ歎て古語の貌ヲ訓ふ、たるもの、ねがえたり、毛詩の清原氏訓點ある古本あどを見よ、今世の讀がまとは異なり、いと正しくよめものふり、そは已が著したる訓點考よ

定家假
古書

委しくへへるを見よ、

然るを和名抄の頃より二百四五十年過ぎて、後鳥羽天皇の御代より京極中納言定家卿私に一家の假字用格を定られて、世に歌よみあどいさる不限りハ必らば此用格を擬すべきも、如くあまゆきしりども、元來古書は擬らば意は任せ定られたるおれば正しくらぬハいふまでも、
いふは、屯べり此頃よりたゞてハ古語の格を失ひて、歌よみも文よみも語格違ひ助辭の則亂れゆきて、いふは古の体は変りたるものとなす、

つれづれ草は何れも古き世のえぢたき、
たゞいふ詞も口をうらとそあまもてゆくおれ、
ハハ車もたげよ、火うけよとたそいひ、
やうの人はもてあげよ、うきあげよといふと見え、
えたふまでもやうく語どもものうつ返ひゆき、
そのらみを思ひやうべ、
○古語の學問世は開けたる事、
古語は廢れて數年を過ぎけり、
元錄の頃より、
たゞて契沖といふ僧、和字正濫抄を著して千載未發の論を立たし、實は卓見といふべし、此書悉

く古典は據りて假字の格を定彼定家段字といふもの、謬りを改たるは、世は古語を用ふるべきの古へは復むと云ふ初より、此僧のいみじき功もぞあまけふ、其自序は音相似、易濫者、中葉以來、學識俱降、且不致意、遂則匪翹混、以為遠於等、道千四位寄推逢寄藍、木居寄戀、云と書けりはまゝとよさることなす、夫の良ならん萬葉集の注代匠記を撰びて世は解うてふり、古言をも我注解したる形ど、皆復古の學問の魁あるべかり、
契沖ハ元録十四年正月廿四日、六十二歳にて

死、慶應四年まで百七十七年を成る、斯て又此、契沖は小後れたる荷田氏、東古道の為は先古語の學問を開むと篤く勤られたることは、國學校を京の東山に建むとして、我願られたる文、謹請蒙鴻慈創造國學校、啓荷田東誓誠恐誠惶頓首、云古語不通則古義不明焉、古義不明則古學不復、云是所以臣終身精力用盡古語と云ふその意明也、

荷田翁元文元年丙辰七月二日、六十八にて死、慶應四年まで百三十四年をなす、

斯て加茂翁真淵此荷田翁の弟子にて古道學のうへよいみどりき功建られたるが其教は古言古明よして古義を得たらず上よて神世の道よ學びいたれと云意を學則よ立られて、まづ萬葉集を委しく考られつ、則古言を明らよ辨られたる、平田氏云此意の教おとは我古學道統のを一へとも稱へつ、一といはれたるハさふことなり、此翁語意考を著れて、初て用語よ活用といふことのあつよを世よ知らしめられたる、

段毎よ初、体、用、令、助の格ありことを、
 るなど、まことよ千古の卓見あれども此書
 今、世よあつてハ、いとも粗漏よて誤れふこ
 とも少う、一然れども活語の祖書よ、此
 よ先よ活語の沙汰あることあり、さて翁
 ハ明和六年十月晦日七十三よて死ニらふ、慶
 應四年まて百五年よ成る、
 斯て此、加茂翁の弟子よ本居翁出られて
 契沖以下の傳ハ三哲小傳また平田氏の玉
 榊ふどよ委しければ、ハハ唯古語の學

の開けゆく大方をいへり、さてまゝ本居翁
の傳ハ已多年種々のものよるもとめて、
其傳を著せり、書名ハ佐吉草と名づく、され
バあゝよハをべり其傳を省けり、

和名抄以來千載トヤは近く誤り來り、於遠トの錯置ト改
改トられ、天の下の人乃眼を開れたる、去れよ
弥古語の學明はあつて、自身ミミカラの歌トも文章トも
自在ト古語を用ゐることよあれり、猶ト叙鏡玉緒
を著れり助辭トの格トは紛トハトきことふく、活語抄
茂著れり加茂翁トの發明せられたる活語の格茂

補正せられたる、

古事記傳をまゝ種々著れたる書多かれ
ども、此トハ古語の格トは係りたるをいふ、
斯て又本居翁トの真ト那ト子トは、春庭全ありて、彼、加茂
翁の語意考父の翁の活語抄トは原トられて、活語の
ことよ數年ト勞トれつゝ、其功業積りて終トは活語
全書あれり、則詞トハ衢トと号トらる、此、書世トは、
れてよる古語の學問ハ大成せられたるあり、
語格ハ詞トハちまるとして大成せられたるもの、
猶次く其を補ひたるハ、若狭國小濱妙玄寺

の義門、伊勢國山田の足代弘訓、同國桑名孫
富樫廣蔭ら也、已もまた種々補ひ正したる
が、今已ぐ弟子共よ示以語格全圖といふも
の也、今世よしてハひもうぐみ玉のをあど
ハをとつ年の曆の如く、本書のハちまゝとら
去年の曆の如きもの也、そハ本書よ助辞続
廿四載られたるを、語格全圖よては百八よ
及へる、又本書よハ詞よのい活用ありて助
辞の活用を遺れたる、又本書よハ体用言の
連続の格あきらららふらば、此外くさぐ補正

上件次くは開けゆき一年敷を負ふるは、語意考
よ了活語抄まで凡廿年、活語抄よハ詞ハ衝の成
れりまで廿一年、うくて補正の成れるよハた
てて五十年よ及べり、されハ語格ハ加茂翁
の其端を癸れたるよ、五十年間を経了漸く遺
る隅あしいと明よハあれるものあり、
○古語の學盛ふる勢よ從ひて遂よ音義學興り
たる事
古語の學問せよ盛よ成れずよ從ひて、遂よ五十

音義の學問興るべき自然の勢あり、そハ語格明
よふれらうへは、その語の本義を明らうよせまふ
しく思ひ、その本義を明らせむよハ、その語を呼
ぶ音の義よ糾さばあるべうぬものあれ
ばふりされば一音毎よ義を會ふこと哉悟ざれ
バ唯延約通畧等よよきて言の義を解き、またハ言
の本義を解むとけらハ詮ふ、唯古人の用ひた
るうへを考ふべ、あど云輩の多くて、音義
よ糾むとけらよ意をつけれら輩何ぞざり
を、文化の頃本居翁の弟子、鈴木朗といふ人阿

きて、初て一音よ義を具へたふことを小考得
て、雅言音聲考卷一といふものを著したるが、音義
學の發微よて、此人此學の鼻祖と稱つべし、然れ
ども終よ波行の五音、また五十音の次第よ拘ら
び前後三四音の義を述べたふまでの事あり、然
るよ此書伐著したふ意を推量りオモ按ふよ、後世此
音聲考よ原モトて篤く考へ廣く古言よ證を取らば、
遂よ五十音各々義を具へたふことを改得て、音
義學の大成をふりべし、然るよ朗ホカダ今晚年よ及び
たれば、數年を経て大成をふむむ齡を保たざ

此バ後學の人を待て大成をふさぐめむといふ
意より、音聲考ハ著したるものと、其書のうへよ
う慥々知られたる、

世に五十音學ふど唱へて、いとも牽強ふ不安
説どもいひさるが、あるハ言靈學ふど唱へ
て、唯延、約、通、畧ふどよのい拘りたるは、此、朗
が癸明したる音義學と其名ハ相似たれど
も、其實ハ炭と雪との違ひあるを、其名の似
たるよよみて同一類のごとく思ひまどふ
ことふられ、

次々天保の頃富樫廣蔭、一音毎ニ義を攷へ得る、
五十音全ク義を具へたるものとあつたふが、音
聲考は次きて第二の祖と稱へつ、然れども
猶草創にていとも粗漏あるの、いあらば、謬りた
ることおも多うり、次は己今ハ廿四五年のむら
しよる古典を講究するいとまよ、此、音義學を研
究しつゝ、終は父母の音、一音五義を具へ、三十六
子音ハ三義を具へたることを攷へ、猶一音毎ニ
開合、輕重、出入、昇降、縮張、清濁の六種の區別ある
こと、又經緯の二行は天地の真理を具へる奇

言靈抄用記

く妙ある位置をふせおこしおぼも致へ得ず、音圖
大全を撰びたり、然れども五十音義ハ天地と共
に限りなく、其理窮りなきは合せしハ、已に考得
たりハ唯千萬の一なるべし、今より後の學者次く
考究たらせよハ、千載の後よ至りて大成をべく
ふむ、

版權免許

明治十年
三月七日

著者 茨城縣士族 堀秀成

東京第三大區七小區
赤塚町四番地寄留
神奈川縣平民

出版人 門人 神保中三
神奈川縣第二大區
山王原村百三番地雇

東京
兌兌
書林

日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
二丁目 山城屋佐兵衛
三丁目 丸屋善七
四丁目 金花堂
本石町二丁目 宛屋喜兵衛
大傳馬町三丁目 東生龜次郎

版權免許

明治十年

三月七日

著者 茨城縣士族 堀秀成

東京第三區七小區
赤塚木町四番地寄留

神奈川縣平民

出版人 門人 神保中三
神奈川縣第二區原区
山王原村百三番地雇

東京
兌
書林

日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
二丁目 山城屋佐兵衛
三丁目 丸屋善七
四丁目 金花堂
本石町二丁目 宛屋喜兵衛
大傳馬町三丁目 東生龜次郎

蹴鞠文籍

明治十年

三月七日

著者 茨城縣士族

堀秀成

堀秀成

堀秀成

